

独創的な自分だけのサウンドを手に入れる！ V256 & VOICE BOX

ご存じの通り、昨今の音楽シーンにおいて機械的に加工されたボーカルは日常的に使われるようになった。ただし、そのほとんどはパソコン上で再現されるものであり、レコーディングではできてもライブでは再現不可能なんじゃ...。なんて思っている人も多いのではないと思う。そんな話題のボコーダーサウンドはもちろん、ステージ上でも摩訶不思議なボーカル・サウンドをいとも簡単に実現するアイテム、electro-harmonixのV256-VocoderとVoice Boxの2モデルを紹介しよう。

V256とは

もはや説明不要かもしれないが、ボコーダーとはボーカリストの声をシンセサイザーなど他の楽器音に置き換えて合成する電子楽器の一種だ。詳しい仕組みなどは割愛するが、ボコーダーの代表的な使用例がいわゆるロボット・ボイスと言われるものだ。そのサウンドはクラブト・ワークやYMOといったテクノ系のアーティストには欠かせないものであるし、今話題となっているマイケル・ジャクソンの楽曲にも使用されていたりする。厳密に言えばボコーダーとは少し違うのだが、PerfumeやDuff Punkなどで聞くことのできる無機質なロボット・ボイスのサウンドといった方がわかりやすいかも知れない。

いずれにしてもステージ上でも安心して使える現行のハードウェア・タイプのボコーダーは一部のシンセサイザーに内蔵されている程度ということ考えると、ギターなど様々なソースでシンプルに扱うことのできるV256は非常に魅力的な製品であると言えるだろう。

多種多様なボコーダー・サウンド

使い方はいたって簡単で、向かって右側面の入力と左側の出力にケーブルを接続するだけ。入力はXLRマイク

端子とギターやシンセサイザーなどの楽器を接続可能なインストゥルメント入力を備え、ファンタム電源の供給に対応してコンデンサー・マイクの使用も可能だ。ちなみにマイクプリアンプはLo/Hiの2段階のゲイン調節が可能となっている。

そして出力側にはXLRアウトからはエフェクト音...つまりボコーダーが掛かった音が、対してインストゥルメント出力にはインストゥルメント入力に接続した楽器のダイレクト音が出されるようになっているので、ギターを接続した場合はこのアウトからアンプに接続することで通常の演奏もできるわけだ。さらに一番左に見えるのはMIDI入力端子。シンセサイザーやシーケンサーを接続すればV256の内蔵シンセサイザーの各パラメーターをリモート・コントロールすることができるようになっている。

続いてボコーダーの各モードを見ていこう。V256には9つのモードが搭載されている。

VOX-ROBOモード

VOX-1、2、3モードはボコーダーの真骨頂であるロボット・ボイスを再現するためのモードだ。この3つのモードは同じものだが、V256は1モードごとに1つの音色プリセットを持つ構造となっており、要するに3つのロボット・ボイスを一瞬で切り替えることができるという訳だ。「BANDS」つまみを回すことで8バンド・ボコーダーから最新テクノロジーを使った256バンド・ボコーダーまでを再現することができるので、80年代風の「いかにも」なサウンドから原音の質感を残したようなナチュラルなサウンドまでを作ることができるようになっている。ちなみにプリセットは5つのパラメーターをすべて保存可能となっている。

DRONEモード

VOX-ROBOモードよりもナチュラルなサウンドが味わえるプログラムで、ボーカリストの声質を活かしつつも変わったサウンドが欲しい、なんてときにオススメのモードだ。シングル・ピッチのSINGLE DRONE、メジャー・トライアド（長三和音）のMAJOR



写真1 ファンタム電源に対応したXLRマイクとフォン形状のインストゥルメント入力を備える



写真2 XLRアウトとインストゥルメント・アウト、MIDI IN端子

DRONE、マイナー・トライアド（短三和音）のMINOR DRONEの3モードが用意されている。

TRANSEPOSITIONモード

外部ソースを使用することなく、ボーカルのピッチを変更するのがこのモード。ピッチの変化はPITCHつまみを回すことによって1オクターブ間で自由に变化させることができる。そして、このモードのときにMIDI端子にシンセサイザーなどを接続するとBANDSノブを使って音程が変更されるまでの時間をコントロールすることができるようになる。例えばノブを回していけばボルタメントが掛かったようなユニークなサウンドを得ることができ、これが中々ユニークなサウンドでオススメだ。

INSTRUMENT CLRL

外部ソースの音程にボーカルの音程に合わせることもできるモード。いくら音痴なボーカリストであったとしても、外部ソースで完全な音程を入力してやればリアル



写真3 V256の9つのモード

タイムに完全ピッチで歌わせられる。このモードで面白いのが、PITCHノブを調整することで、ボーカルの音程を変更させるかどうかを外部ソースの音量でコントロール...つまり外部ソースの音量をスレッシュOLDのように扱うことができるということ。例えばPITCHノブを最大にすれば、外部ソースから次のピッチの音が入力されるまでいくらボーカルが音階を歌ったとしても同じ音が鳴り続けるという仕組みだ。

REFLEX-TUNEモード

これはボコーダーというよりも近年流行のピッチ補正機能なのだが、事前にスケールやキーを設定しておけば、ボーカリストの音程をスケールに合わせて自動的に補正してくれるのがReflex-Tuneモードだ。ただしそれだけではない。V256が優れているのは外部ソースとして和音演奏を入力すると、自動的にキーを検出してボーカルのピッチを合わせてくれる。検出も非常に正確で音楽的に破綻しないのである。しかもBANDSノブでピッチの変化（修正）速度を变化させることができるので、Auto-Tuneのような「ケロリ」も再現できるのである。

アイデア次第で無限の可能性

ここまで、いくつかツマミの機能について触れてきたが、5つの黒いツマミを調整することで細かな音作りができるようになっている。ツマミは左からドライ音とウェット音のバランスを取るための「BLEND」、ボコーダーのバンドとTRANSPPOSITION、INSTRUMENTS CONTROLモードではボルタメント・タイムを調整する「BANDS」、「TONE」、フォルマントをコントロールする「GENDER BENDER」、「PITCH」となっている。中でもGENDER BENDERを調整することで男性声を女性声のように聞かせることができる。V256の特徴的なパラメーターなので製品をチェックする際にはぜひ触って欲しい。そしてこれはボコーダーの楽しみ方の醍醐味でもあるのだが、同じ8バンドのロボット・ボイスであってもキャリアのソースがギターとピアノなどでは質感がまったく違ってくるので、色々試してみたい。

V256は従来のボコーダーとして高いクオリティーを備えているだけでなく、TRANSEPOSITIONモードやREFLEX-TUNEなどはボコーダーという枠に囚われない、インテリジェンスな次世代ボーカル・エフェクターといっても過言ではないだろう。一見シンプルに見えるが作れる音の幅は膨大で、アイデア次第で様々な魅力を持つエフェクターに変化してくれる一台だ。

インテリジェンスなハーモニー・マシン

VOICE BOXは自分の声から最大4パートの重厚なコーラスを生成可能にするハーモニー・マシンで、ただコーラスを重ねただけでは再現不可能なメカニカルであり

ながらも心地良いサウンドが魅力だ。

こちらでも使い方は非常に簡単で、インストゥルメント入力に接続したギターやキーボードで和音を奏で、後はマイクに向かって歌うだけ。これだけでリアルタイムに一人多重コーラスを再現できる。VOICE BOXも9つのモードから構成されているので、主な役割ごとにまとめてみよう。

HARMONYモード

3度下と5度下の音程を生成する「Low Harmony」、3度上と5度上の「High Harmony」、3度下と3度上の「Low+High」と3つのデュアル・ハーモニー・モードと、3度下と5度下と3度上の3ハーモニーから成る「Multi Harmony1」、3度下と5度下、3度上と1オクターブ上のハーモニーを加える「Multi Harmony2」、そしてオクターブ下と5度下と3度上と5度上の「Multi Harmony3」のマルチ・ハーモニー・モードの合計6つの組み合わせが選択できる。組み合わせを見るだけでも、一般的なコーラスで使われる組み合わせをほとんど網羅していることがわかるだろう。特にマルチ・ハーモニー・モードの重厚なサウンドはただ歌うだけでも独特な気持ち良い響きを得ることができるのだ。もちろんツマミを使うことでミックス量を調整することができるので2声のコーラスも作れる。

ただし、3度の和声を足すときにメジャー・コードなのがマイナー・コードなのが...すなわちキーやスケールの問題が出てくる。VOICE BOXではギターやキーボードで入力された和音を自動的に解析し、そのスケールに合った和音を自動的に生成してくれるのだ。実際にメジャーとマイナーを切り替えながらテストしてみても、きちんとリアルタイムに追従し、V256のREFLEX-TUNEモードと同様に音楽的に破綻することはない。ただ、入力するコードはテンション・コードのようにあまり複雑なコードよりも、4和音程度にした方が良かったらう。

OCTAVEモード

オリジナルの音程に上下1オクターブのコーラスを追加するモードで、VOICE MIXつまみによってミックス量を調整することも可能だ。なお、オクターブ・モードは外部ソースを入力する必要がないので、一番手軽に使うことができる。このモードでGENDER BENDERノブを回していくと下のパートはより男性的な声に、上のパートは女性的なフォルマントに調整されるので、かなり面白い効果を



写真4 VOICE BOXの9つのモード



VOICE BOX / 税込価格：4万4,100円
寸法：144W x 119H x 60Dmm ・重量：550g ・電源：専用アダプター付属（9VDCセンター・マイナス）

得ることができる。

UNISON+WHISTLEモード

このモードはユニゾンとホイッスルの2タイプを使うことができるのだが、まずユニゾン・モードはピッチを変更することなくフォルマントだけを変更、ホイッスル・モードは原音から2オクターブ上の音を加えることにより、文字通りホイッスル（口笛）のようなサウンドを再現することができる。

VOCODERモード

VOICE BOXのボコーダー・モードは256バンド固定で、残念ながらV256のようにバンドを変化させて音作りを楽しむことはできないものの、V256のROBO-VOXモードを256バンドで使用したときと同じクオリティーのサウンドを実現している。純粋なボコーダー・サウンドが欲しいというのなら十分満足できることだろう。

リバーブがキモ

ツマミで調整可能なパラメーターはドライ音とウェット音のバランスを取るための「BLEND」、ドライ音（元のボーカル）用のリバーブ量を調整する「DRY」、ハーモニー音のリバーブ「Harmony」、V256同様にフォルマントを調整する「GENDER BENDER」、ボイス・ミックスやユニゾンとホイッスルを切り替える「LowHigh」とこちららも5つのつまみとモード・セレクトノブというシンプルなデザイン。やはり注目すべきはリバーブを内蔵している点で、原音とハーモニー音で独立してリバーブ・コントロールできるというのがポイント。特にハーモニーの数が多いため場合にリバーブを深く掛けるとどうしても濁ってしまう傾向にあるが、例えば原音はドライで、ハーモニーに深いリバーブを乗せることで芯は残しつつも微妙な響きがコントロールできるのである。ハーモニーを重ねて行っても邪魔にならない空間演出ができる、これもVOICE BOXならではの魅力ではないだろうか。

今回紹介したV256とVOICE BOXは一見似ているようにも、それぞれに強力な個性を持ったまったく別の製品と考えて欲しい。共通して言えるのは、多機能ながらシンプルな操作性を実現し、ライブで使いたくなるモデルであるということ。オーソドックスに使うもよし、独創的なサウンドに使うも良しのV256とVOICE BOXの魅力、ぜひ実際に触れてみて確認してみたい。